

## あなたが共にいてくださるなら

福音書記者マタイは、主イエス・キリストの誕生を告知させるのに、まずイスラエルの先祖であるアブラハムから系図を起こしてゆきます。1章1節に「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」と断りをいれてです。アブラハムからダビデ王までが14代、ダビデ王からバビロンへ移住させられるまでが14代、そしてバビロンへ移されてからキリストまでの14代の人物をあげ、そのうえでただいま読みましたように、「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった」と、その複雑な事情を説き明かすのです。誕生の次第とは「由来・来歴」のことです。そもそも系図自体が時間の地図のようなもので一筋の糸のように、バビロン捕囚のような民族の危機的な状況にあっても命のつらなりが恵みによってつながれてキリストの誕生に至ったことを読者に思い起こさせるのです。わたしたちはユダヤ人ではありませんので、この系図にあまり感銘を抱くことなく、カタカナの羅列を呪文のようにさえ感じてしまうのですが、少しずつ聖書に親しんでゆくと、これらの名前の背後に多くのドラマがあること、神の恵みと導きがなければ決してつながれることのなかった命であることが分かってまいります。そして、そのような導きの結果、いまその現在進行形の恵みの出来事として、イエス・キリストの誕生にまつわるヨセフとマリアの日々があるのだと記すのです。そのことによって、いまは系図のかたちに縮められているけれども、一人ひとりの人生に、命が継がれてゆく際のドラマがあり、そこにも神の恵みのご支配があったことを見て取るように促しているのです。

ヨセフはそのとき、目の前が真っ暗になるような気持ちで過ごしていたに違いありません。婚約中のマリアが身ごもったと

いう出来事は不貞を働いたとしか考えられなかったからです。

「夫ヨセフは正しい人であったので」と書かれておりますから、それゆえに悩みは深かったであろうと思われれます。しかも彼の正しさというのは、自分や家の名誉を守ろうとして、マリアや彼女の家族に恥をかかせるようなかたちで表されるのではなく、「ひそかに」縁を切ろうとした、つまり傷つけまいとした。そのような正しさであったことが記されています。わたしたちはしばしば自分の正しさを主張するために、相手のミスをあげつらう。相手の人格を攻撃することがあります。相手を下げることによって、自分をあげようとする。そういう傾向があります。しかし、ヨセフはそういう人ではなかった。彼の正しさは愛と配慮に裏付けられていた。そこに心を納めるためにどれほどの祈りの戦いがあったらうかと思えます。目の前が暗くなるような気持ちで過ごしていただろうと申し上げたのはそういう意味です。ここでヨセフがマリアを離縁していたならば、新しい世代へと糸はつながれることはなかった。キリストの誕生はなかった。ヨセフは自分たち夫婦が神様の御計画によって救いの歴史の重要な担い手に選ばれたことを、夢の中で、主の天使から告げられます。福音書記者ルカはマリアへの受胎告知に天使が現れたことを記しますが、マタイはマリアではなく、ヨセフに訪れた天使の存在を記します。そして天使はこの由来を説き明かすのです。マリアの胎の実は聖霊によって宿った。つまり、神の力が働いてこのことが起きていると告げ、恐れずにマリアを妻として迎え入れるようにと促します。生まれる子は男の子であり、その子をイエスと名付けるようにというのです。イエスとは「主は救い」という意味です。目が覚めるとヨセフは、主の天使が告げた通りにマリアを迎え入れます。彼が「正しさ」のゆえに密かに離縁しようとした計画は、神さまの御計

画によって上書きされた。ヨセフは自分の道を譲ったといえるでしょう。お言葉通りこの身になりますように、とは、ルカが記すマリアの言葉ですが、マタイにおいてもヨセフは主の天使の言葉をその通りに受け止めて実行したことになります。

ところで夢の中で、主の使いと出会い、語り合っ、眠りから覚めて後、その指示に従うという流れは、創世記に記されるヤコブのエピソードを思い起こさせます。荒れ野で石を枕に眠ったヤコブの枕元に天にまで届く梯子がたち、神の使いが上り下りする。そこに主が降ってこられてヤコブと会話をするという個所です。これは大変重要な場面で、ヤコブが父イサクの神を、自身の神とする有名な個所で、目が覚めてのち、枕にしていた石に油を注いで聖別し、ベテル（神の家）と名付けます。そして、夢で告げられた教えに従って歩み始めるのです。荒れ野で石を枕に眠るヤコブはどこにも行き場がない状態だったのですが、救いは上から来た。神が降りてきてくださり、彼と共にいることを約束された。そしてヤコブの命をつなぐのです。こういう個所を読んでおられますと、わたしたちにもそういうことが起きないかなと思わないでしょうか。むかしわたしは自分自身の進路、人生の別れ道に立って、どの道が正解か自分では判断がつかない。そういう時に、聖書の人物がそうだったように夢の中にでも何か示しがないものかしら、と思ったことがあります。ただ天使が夢の中に出てくるというようなことはなかったですね。しかし、これは皆さんも経験がおありなのではないかと思うのですが、不思議とそういうときに、教会で聴いた説教が慰めとなり、示しとなる。進んでみて結局、その方向が閉ざされていたこともあります。しかし、それでもその日、道を進む力と勇気が与えられ、結果が示された上で正しい道へと向きを変えて進んでゆく。そのための迂回路だったのだと自分

で理解することも許される。それにはやはり御言葉なのです。ヨセフ自身が、マリアを迎え入れる決心をするのも主の使いが、このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった、と預言者イザヤの御言葉を伝えているのです。主の使いは、要するに、ヨセフにこの御言葉を説き明かしたのだと言ってよい。「御言葉が打ち開かれれば光を放ち、無知な者にも諭しを与えます」とある通り、今、想定外の出来事に悩むヨセフに、その状況を説き明かす御言葉が示された。あなたは神の救いの御計画に参加している。あなたも知っているだろう。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。この説き明かしに、ヨセフはアーメンと応えたのです。そして、お言葉に自分とマリアの身を添わせた。こうして危機が機会に変えられ、命がつながれてゆくのをわたしたちは見るのです。神の言葉が出来事となり、苦難の中にある信仰者を支える。御言葉の中にある力と命が、わたしたちが暗闇のなかにいると思われた時も道を照らす光となるのです。それこそが「神が我々とともにおられる」、いまでも生きて働きたもう神の憐みのなせる働きであることをこの出来事は伝えているのです。今週、主のご降誕を迎えるわたしたちはこの恵みの出来事を通して、神の偉大な救いの御業を褒めたたえ、わたしたちに幼子の姿を取ってまで寄りそおうとされるインマヌエルの真実をともに喜びたいと願います。

お祈りいたします。